

曲目をめぐる

尾崎 正峰

A.ボロディン(1833~87) 歌劇「イーゴリ公」序曲

《化学と音楽の「二刀流」》

社会に暗い影を落とし続けている新型コロナウイルスの世界的な感染拡大。そんな 2021 年の中でひとときわ明るい輝きを放っていたのが、アメリカ大リーグの大谷翔平選手の「リアル二刀流」の活躍だったのではないのでしょうか。

大谷選手のようにいくつもの面で並外れた才能を発揮する人を指す「天は二物を与えた」との言葉もありますが、ボロディンは、まさにそんな才人でした。今なお親しまれている交響詩『中央アジアの草原にて』(1880)、第3楽章「夜想曲」が有名な弦楽四重奏曲第2番(1881)など、叙情性に富み、情熱的な力強さをも兼ね備えた音楽を紡ぎ出した彼の「本職」は音楽とはまったく別の領域のものでした。

サンクトペテルブルク大学医学部を修了、その後、ドイツ最古の大学である名門ハイデルベルク大学で化学を学び、母校サンクトペテルブルク大学医学部教授として有機化学の分野で多くの業績を残しました(「ボロディン反応」という専門用語すらあります)。一方、音楽については、長くピアノのレッスンを受けていましたが、1863年、「ロシア五人組」の指導的立場のバラキレフ(1837~1910)に出会い、30歳の声を聴く頃になって初めて正式に作曲を学ぶこととなります。「天は二物を与えた」ボロディンは、研究者、教育者としての多忙な日々を送りながらも、1866年末に早くも交響曲第1番をまとめ、1869年に初演を果たします。その余勢を駆って、同年に交響曲第2番、そして、中世ロシアの叙事詩『イーゴリ遠征物語』を題材にした歌劇「イーゴリ公」に着手します。

《思いをつなげた共同作業》

とはいえ、多忙な日常に変わりはなく「イーゴリ公」の作曲の筆は遅々として進みませんでした。業を煮やした友人たちの画策で、出版の印税を前渡しして気持ちを鼓舞させようともしました。それでも作曲のための時間の捻出が難しい状況が続く中、未完成のまま、ボロディンは1887年に急逝してしまいます。訃報に接したリムスキー・コルサコフ(1844~1908)とグラズノフは、自分たちの手で完成させることを決意します。残されたスケッチは膨大でしたが、ほとんどが断片的なものでした。二人は上演可能な版を創り上げるため、オーケストレーションの他、不足や欠落の部分を補い、1888年に完成、1890年にサンクトペテルブルクのマリンスキー劇場で初演されました。ロシア・オペラの名作として今日まで上演さ

れ、劇中の「ポロヴェツ人(だったん人)の踊り」は頻繁に単独で演奏されます。

序曲と第3幕のほとんどはグラズノフの作とされ(フランシス・マース『ロシア音楽史』春秋社、2006)、スコアの冒頭に「序曲はボロディンのピアノ演奏をししば聴いていたグラズノフが記憶に従って完成させた」旨が記されています。グラズノフ自身の言によれば「ボロディンのプランに従って主題はオペラの中の相当するナンバーから取り出した」こと、「第2主題のカノン風のエンディング」、「中間部の低音部の進行」、「イーゴリ公のアリアとトリオの主題の絡み合い」などは残されたスケッチやノート、さらには紙の切れ端から見つけたとのことです。そして「ファンファーレを少し変えた」、「最後の数小節は自分が作曲した」とも記しています(John Tait, *Possessed by Music: An Outline of the Life and Achievement of Alexander Glazunov*, Melrose Press, 2017)。序曲にまつわる別の逸話として、ボロディンが存命中のある日、グラズノフがボロディンに序曲のピアノ演奏を請いましたが「疲れているので」と断られ、代わりに自分が演奏することにしました。以前何度か聴いたことのある序曲の演奏は、ボロディン自身が「最後の音まで完璧だった」と語ったとされます(S. Dianin, *Borodin*, Oxford University Press, 1963)。

重々しい序奏から、ポロヴェツ軍の凱旋を祝う場面のテーマでグラズノフが「ファンファーレ」と称した部分に移り、一気に活気を帯びます。第2幕のイーゴリ公のアリアに基づく激しい下降音型、それとは対照的な流れるような旋律の第1主題をクラリネットが奏します。次に、囚われの身となったイーゴリが祖国を思って歌う第2幕のアリアのテーマの第2主題が全管弦楽で歌い上げられます。続けてイーゴリの貞節な妻を表す新しいテーマがホルンによって提示され、楽器を変えて引き継がれます。展開部ではチェロとコントラバスによって第1主題が転調を繰り返して奏され、その後、激しい下降音型が再び顔を出し、「ファンファーレ」と絡み合いながら進行します。再現部は冒頭の提示部が繰り返され、各主題、メロディの組み合わせの後、力強い和音で終わりを告げます。(演奏時間:約10分)

A. グラズノフ(1865~1936)

演奏会用ワルツ第1番 ニ長調 作品47

《ロシア音楽史上に光を放つ》

グラズノフは「ペテルブルク学派の国民主義と西洋音楽の様式を融和させた」(『ロシア音楽事典』河合楽器製作所出版部、2006)ロシア音楽史において重要な作曲家です。当団の第39回定期演奏会(2017)で彼の交響曲第5番を取り上げましたが、生涯に8つの交響曲を完成させ、バレエ音楽《四季》(1899)などの管弦楽曲、弦楽四重奏曲など幅広いジャンルをカバーしています。ヴァイオリン弾きの解説子としては、彼がサンクトペテルブルク音楽院の院長時代に同音楽院で学ん

だ往年の名ヴァイオリニスト、ヤッシャ・ハイフェッツ(1901～87)やナタン・ミルシテイン(1903～92)が愛奏したヴァイオリン協奏曲(1904)に心惹かれます。

グラズノフの音楽的才能の素晴らしさは、前述の驚異的な(音楽的)記憶力など多くのエピソードで語り継がれていますが、その早熟ぶりを端的に示すものが、1882年3月、彼が作曲の基礎を学んだリムスキー＝コルサコフの指揮によって初演された交響曲第1番です。この時わずか16歳。いかに天賦の才に恵まれていたのかが推し量れます。

《「神童」で終わらなかった》

若くしてセンセーショナルな成功を収めたグラズノフですが、人間の常として一年一年、齢を重ねていきます。「神童」ともてはやされたものの長じて「ただの人」ということもしばしばありますが、彼は着実に国内外での活躍の地歩を固めていきます。「演奏会用ワルツ第1番」を作曲した1893年前後の時期に注目してみると、交響曲では、第3番(1890)、第4番(1893)、第5番(1895)、第6番(1896)と立て続けに筆を執り、バレエ音楽《ライモンダ》(1897)などの管弦楽曲、弦楽四重奏曲や多くのピアノ曲を生み出しました。変わり種としては、彼が子どもの頃から親しんでいたショパンの4つのピアノ曲をオーケストレーションした組曲『ショピニアーナ』(有名な「軍隊ポロネーズ」が1曲目)作品46(1893)があります。

印象的なトピックとしては、1893年、コロンブスによるアメリカ大陸発見400年を記念してシカゴで開催された万国博覧会のために「凱旋行進曲(The Triumphal March)」作品40(1892)を作曲したことが挙げられます。当初はチャイコフスキー(1840～93)が依頼を受けていたものですが、彼が辞退し、代わりにグラズノフを推薦したという経緯があります(John Tait, op.cit.)。「リパブリック賛歌」(日本では「オタマジャクシはカエルの子」、あるいは「権兵衛さんの赤ちゃんが風邪ひいた」の歌詞でよく知られています)をモチーフにした同曲は、博覧会の開会式で演奏され、若い作曲家が新大陸でその名を知らしめる機会となりました。

《「ワルツの時代」の絶品》

この時期の彼のもう一つの音楽的特徴を示すキーワードは「ワルツ」です。

近代ロシア音楽の祖グリムカ(1804～57)の「幻想的ワルツ」(1839)など、ロシアの多くの作曲家がワルツを手がけましたが、これに拍車をかけた人物が、当時、人気の絶頂にあった「ワルツ王」ヨハン・シュトラウス2世(1825～99)でした。彼は、1856年、サンクトペテルブルクの南方にある都市バヴロフスク(富裕層の夏の別荘地でした)で演奏会を開催し好評を博します。以後10年間にわたる彼のロシアでのコンサートは、当時の皇帝アレクサンドル2世の臨席を得るなど、ロシアの人々のワルツへの熱狂をさらに昂進させました。チャイコフスキーが『白鳥の湖』などバレエ音楽に用いることは当然のことですが、交響曲第5番(1888)の第3楽

章に初めてワルツを取り入れるなど、その影響は大きなものでありました。

グラズノフも、ピアノ作品として、1892年に「小さなワルツ」作品36、1893年に「演奏会用大ワルツ」作品41、「3つの小品(パストラール、ポルカ、ワルツ)」作品42、「サロン・ワルツ」作品43、そして、1894年に第1番と対となる「演奏会用ワルツ第2番」作品51、のように集中的にワルツ作品を手がけています。

若き創作力が充実を見た時期に生み出された「演奏会用ワルツ第1番」は、美しさ、管弦楽法の巧みさが際立つ“絶品”の名にふさわしい作品です。幻想的な序奏に続いてクラリネットとヴィオラが奏でる絶美のメロディは、楽器を移り、そして重なり合いつつ繰り返された後、少し形を変えた序奏を経過して第2ワルツが登場します。シンコーペーションを伴うメロディは心地よい揺らぎを感じさせます。テンポを落としてクラリネット同士の絡み合いや木管とヴァイオリンとの応答の後、再び第2ワルツが登場します。序奏と第1ワルツが回帰した後、軽やかなステップを表す音楽に変わり、これまで登場したモチーフを絡めながら次第にテンポを上げ、最後の見せ場とばかりに、女性のスカート裾が遠心力で広がるほどスピーディに回転する踊り、あるいはバレエの舞台の群舞の賑わいを連想させる華やかな盛り上がりを見せます。(演奏時間：約10分)

A. グラズノフ(1865～1936)

アルト・サクソフォンと弦楽オーケストラのための協奏曲 変ホ長調 作品109

《ロシア出国、そして海を渡る活動へ》

「演奏会用ワルツ第1番」から40年後の1933年。グラズノフは「アルト・サクソフォンと弦楽オーケストラのための協奏曲」(以下、サクソフォン協奏曲)を作曲します。この間、1899年、サンクトペテルブルク音楽院教授、1905年には院長に就任するなどロシア音楽界を牽引する地位にあり、1917年のロシア革命という激動の時代には政治との駆け引きなど、多方面に多忙な日々を送っていました。そして迎えた1928年。ウィーンで開催されたシューベルト没後100周年記念行事への参加を機にロシアを出て、再び彼の地に戻ることはありませんでした。

パリに居を構えてからの生活は経済的に厳しいときがありましたが、パリには多くのロシア人移民が住んでいたことが幸いしました。サンクトペテルブルク音楽院で長年にわたって同僚だったニコライ・チェレプニン(1873～1945)が出版社にグラズノフの新作を出版するように依頼するなど、手をさしのべてくれる人々が彼の周囲にいました(ちなみに、ニコライの息子アレクサンドル(1899～1977)が主宰した作曲コンクールで伊福部昭(1914～2006)の「日本狂詩曲」(1935)が第1位、松平頼則(1907～2001)の「パストラール」(1935)が第2位を獲得しています。アレクサ

ンドルが指導した日本人作曲家として他に早坂文夫(1914～55)がいます。

こうした援助のおかげもあって、ロシア時代とは異なる彩りをもった活動の拡がりがありました。ヨーロッパ大陸から海を渡り、ロンドンで自作の指揮の棒を執り、ロンドンでは自作《四季》のレコーディングも行いました。いったんパリに戻ってからしばらく後の1929年11月、アメリカへの楽旅に赴きます。メトロポリタン・オペラハウスでの自作のコンサート、グラズノフ臨席の下でニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団(現、ニューヨーク・フィルハーモニック)が彼の交響曲第4番を演奏するなど、歓迎一色でした。訪米中、新しい音楽への好奇心旺盛な一面も見せます。ガーシュイン(1898～1937)をソリストとするニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団の演奏会で彼が望んでいた『ラプソディ・イン・ブルー』を聴きました。この時、ガーシュインからオーケストレーションを教えてほしいとの要望がありましたが、彼は別の作曲家を紹介しました。

シカゴ、ボストンとコンサート・ツアーが続いた後、パリに戻る航海中、グラズノフは、最後の室内楽曲となる弦楽四重奏曲第7番ハ長調作品107(1930)の作曲に取りかかりました。続けて、「チェロとオーケストラのためのコンチェルト・バラータ」ハ長調作品108(1930)に着手、ベルリンでの「イーゴリ公」のドイツ初演、ロンドンへの再楽旅など、以前から患っていた狭心症、リウマチなど健康上の問題を抱えながらも精力的な活動を続けていました(John Tait, op.cit.)。

《創作のインスピレーションを喚起させるプレイヤーとの出会い》

グラズノフ最晩年の作であるサクソフォン協奏曲誕生の背景には、彼とサクソフォンの名手二人との運命的な出会いがありました。

一人目は、フランスの伝説的名手マルセル・ミュール(1901～2001)です。1932年、グラズノフは、ミュールを中心とするサクソフォン四重奏のグループ“Quatuor de la Garde Républicaine”(1927年結成)の演奏を聴き、その音色と演奏技術や音楽性の高さに感銘を受け、サクソフォン四重奏曲の作曲を決意し、ほどなく完成させた変ロ長調作品109を同グループに献呈しました(この作品は今なおサクソフォン四重奏の重要なレパートリーです)。

二人目は、ドイツに生まれ、ヨーロッパ、そしてアメリカでソリストとして活躍し、数多くのサクソフォンのための作品を委嘱、献呈されたシガード・ラッシャー(1907～2001)です。1933年12月14日に行われたミュールのグループによるサクソフォン四重奏曲の公開初演の観客の中にラッシャーがいました。興奮したラッシャーは、終演後、楽屋にグラズノフを訪ね、自分にも四重奏曲を演奏させて欲しい旨を告げると、グラズノフは父親のような口調で「若者よ」と語り始め、許可を与えました。その翌日、ラッシャーはグラズノフの家を訪れ、サクソフォンという楽器の潜在的な可能性を示す見事な演奏を披露し、この楽器のための協

奏曲を書いてほしいと依頼します。グラズノフは快諾し、わずか3カ月で完成させました。初演は、1934年11月26日、スウェーデンのニューヒーピングにある聖ニコラス教会で、ラッシャーの独奏、トルド・ベナー指揮ノーショーピング交響楽団によって行われました。その後、1935年1月20日にパリでミュールをソリストに迎えてフランス初演、1938年1月14日にはラッシャーがロンドン初演を果たします(John Tait, op.cit.)。

初演に先立ち、あらためてグラズノフを訪ねたときの思い出をラッシャーは「彼は非常に忍耐強く、すべて詳細に説いてくれた。半世紀以上経った今でも、彼が音楽について語ったことだけでなく、巨匠の声や表情、部屋の調度品まで鮮明に記憶に残っている」と語っています。そして、ミュールは「(グラズノフは自らの)サクソへの関心を喜ばしく受け止めてくれ、サクソフォン奏者のレパトリーを素晴らしく豊かにする最高の質の2つの作品を捧げてくれた偉大な作曲家を、私は素晴らしい記憶として持っている」と述べています(John Tait, op.cit.)。

グラズノフの協奏曲の中で最もコンパクトなこの作品は、彼の元々の音楽的特性に加えパリやアメリカでの音楽経験が反映されていると言われます。急一緩一急の3つのセクションに分かれており、続けて演奏されます。弦楽器のユニゾンで主題が提示され、ソロによってさまざまな装飾、変奏が施されます。第2部(アンダンテ)は、メランコリックで渋い装いのもと、サクソフォンの表現力と音色の多彩さが印象的です。第3部との間のカデンツァは名手二人がグラズノフに与えたインスピレーションの発露であるかのようです。第3部(アレグロ)では、ソロが奏でる軽快なフガートと共に、伴奏の弦楽器とのやりとりが聞き物です。第1部と第2部のテーマが再び現れ、テンポが速くなり、勢いを増して幕を閉じます。

《死出の旅の供に／故郷で共に眠る》

サンクトペテルブルク音楽院のかつての教え子で名ヴァイオリニスト、エフレム・ジンバリスト(1889～1985、江藤俊哉(1927～2008)がアメリカのカーティス音楽院で師事した)が作曲を促し、1935年4月に完成した「オルガンのための幻想曲」ト短調作品110が彼の最後の作品となりました。その後、友人への手紙に「演奏することも、字を書くことも大変困難です」と書き綴るほど体調は悪化し、1936年3月21日、永遠の眠りにつきます。死のわずか数時間前、出版社が彼のアパートにサクソフォン協奏曲のスコアの初版を届けていました(John Tait, op.cit.)。

一家で1931年にパリから居を移したヌイイ＝シュル＝セヌの地に葬られましたが、約四半世紀後の1972年、遺骨が生地サンクトペテルブルクにあるアレクサンドル・ネフスキー大修道院の墓地へと移されます。そこで、彼と関わりの深いボロディンやリムスキー・コルサコフ、そしてチャイコフスキーらと共に眠っています。

(演奏時間：約14分)

A. ドヴォルザーク(1841～1904) 交響曲第8番ト長調 作品88

《チェコの国民音楽の勃興とドヴォルザークの榮譽》

チェコでは、三十年戦争(1618～48)の敗北によって主権を失って以来、ハプスブルク家による統治を受ける中でドイツ(語)文化が主流になっていましたが、19世紀に入り、チェコの民族的、文化的復興の気運が高まります。そうした社会のうねりの中で、連作交響詩『わが祖国』(1874～79)やオペラ『売られた花嫁』(1863)などチェコを題材とする数々の作品を生み出した《チェコ国民音楽の父》と称されるスメタナ(1824～84)が登場します。もう一方の雄であるドヴォルザークは、スメタナがあまり手がけなかった交響曲のジャンルに秀で、ブラームス(1833～97)からも評価され、チェコが誇る作曲家として国際的名声を得るに至ります。

交響曲第8番が生み出された時期は作曲家としての最盛期にあたり、それに呼応するかのよう、1889年6月、「オーストリア三等鉄王冠章」の勲章授与、12月には皇帝フランツ・ヨーゼフ1世(1830～1916)に謁見。1890年、チェコ芸術科学アカデミー会員に推挙。1891年3月、プラハのカレル大学から名誉哲学博士号、6月にケンブリッジ大学から名誉音楽博士号の授与など、さまざまな榮譽を受けました。普通の人なら舞い上がって天狗になってしまいそうですが、お偉い教授陣に囲まれたケンブリッジ大学での格式高い学位授与式について「あの時は針の山に立たされたようなつらい思いをさせられた」と友人にこぼしたそうです(黒沼ユリ子『ドヴォルジャークーその人と音楽、祖国』富山房インターナショナル、2018)。仰々しく堅苦しい場は苦手のように、彼の人となりを示すエピソードです。

《無関係のようで、つながっている?》

交響曲第8番は、9曲ある彼の交響曲の中で第9番「新世界より」と並んで人気が高く、頻繁に演奏されます。1889年8月26日にスケッチを始めてからわずか3ヶ月弱、11月8日に完成するという速筆でした(佐川吉男『チェコの音楽—作曲家とその作品』芸術現代社、2005)。かつて「イギリス」の副題が流布していましたが、その理由は、長くドヴォルザークの作品を出版していたジムロックと金額をめぐって折り合いが付かず、最初の訪英以来の付き合いがあったイギリスのノヴェロ社が出版したからでした(内藤久子『チェコ音楽の魅力—スメタナ・ドヴォルジャーク・ヤナーチェク』東洋書店、2007)。

非常に単純な理由で、イギリスとはまったく関係ない作品とも言えますが、彼とイギリスとのつながりは深いものがありました。1884年3月、最初の訪英の際、自作の指揮をした演奏会はいずれも好評で、3月13日の巨大なロイヤル・アルバート・ホールでの《スターバト・マーテル(悲しみの聖母)》の演奏に対してホ

ールを埋め尽くした観衆は熱狂的な拍手を送りました。友人に宛てた手紙に「これ以上望めないほどの成功」としたためるほどでした。同年9月にはウースター市(イギリスの大作曲家エルガー(1857~1934)の故郷)の音楽祭に招かれ、生涯に9回イギリスを訪れることとなります。こうした良好な関係の中でのイギリス訪問で得た報酬やノヴェロ社の依頼による新しいオラトリオの作曲料などによって、故郷の村によく似たヴィソカーに別荘を購入する資金を得ることができました。

プラハの南西 60 キロほどに位置するヴィソカーへ、春になるのを待ちかねたように出向き、秋になるまで家族とともに過ごしました。「基本的には田舎暮らしのほうが性に合い」、ニューヨークで暮らした際も「農民のように早起きの生活をしていた」(クルト・ホノルカ『ドヴォルザーク』音楽之友社、1994)彼にとって、ヴィソカーという心から落ち着いて創作に取り組める環境が、交響曲第8番をはじめとする名作を生み出す土壌となったといえるでしょう。

《ドヴォルザークの真骨頂》

楽天的で質実剛健なチェコの民衆、のどかで自然豊かなチェコの田園風景を表象するとともに、素朴な彼の人となりをも示す作品といえる交響曲第8番。円熟した作曲技法がそこかしこにちりばめられていますが(池辺晋一郎『ドヴォルザークの音符たち』音楽之友社、2012)、聴く者にとってはそんな「仕掛け」があることなど感じることなく、至極自然に曲の美しさが耳に届いてくる作品です。

第1楽章 Allegro con brio 冒頭のト短調の嫺嫺とした美しいメロディに続く田園の小鳥のさえずりを連想させるフルートによるト長調の第1主題。このように短調と長調を頻繁に交替させることで明暗の対照を鮮やかに示す手法を全楽章通して用いています。また、序奏から派生したモチーフを用いて全体的な統一感を醸し出しています。コラール風の第2主題は次第に激しさを増して展開します。

第2楽章 Adagio 自由な三部形式 彼が愛した自然豊かな田園の移り変わりの息づかい、そして、そこに暮らす人々の心情の変化をなぞるかのような、瞑想的であるとともに詩情あふれる音楽が満載の楽章です。

第3楽章 Allegretto grazioso 三部形式のワルツ 主部のト短調のテーマ、自作オペラ『頑固者たち』(1874)のアリアのメロディを流用したトリオのト長調の主題、ともにメロディの美しさが堪能できます。コーダは速度を上げ最終楽章へ。

第4楽章 Allegro ma non troppo 自由な変奏曲形式 颯爽としたトランペットのファンファーレの後、チェロが奏でる第1楽章のフルートのさえずりと関連した主題を元に、古典的なたたずまいの作品ながら変奏曲の手法が執られます。快活な主部に入り、フルート・ソロの見せ場を挟みながら、ト長調とハ短調の往復で音楽は展開します。冒頭が再現され、木管楽器と弦楽器との穏やかで細やかな対話の後、再び勢いづいてクライマックスへ。(演奏時間：約35分)